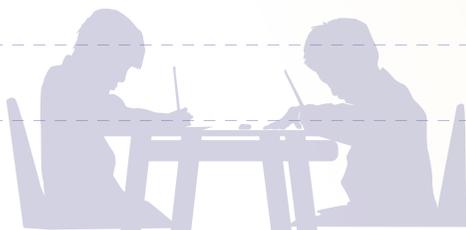


特集

# 「統一合判」 中学入試レポート vol. 2

## 進学実績や学習指導だけじゃない、 私立中高一貫校の 多様な活躍と成果

5年生の「統一合判」模試は今回で2回目。大勢の仲間が集まって力を競う、こうしたテストの雰囲気や形式に、はじめて触れた受験生も多いと思う。再来年2月の入試まで、まだ約1年と5か月あるが、夏休みを終えて受験勉強も本格的な実力養成段階に入ったいま、気を抜くことなく、来春の6年生としてのスタートに向けて弾みをつけよう。今回は、今後の学校選びのためのひとつの視点として、「2020年大学入試改革」に対応できる力を育むことにもつながる「進学実績や学習指導だけじゃない、私立中高一貫校の多様な活躍と成果」をお伝えしたい。



首都圏模試センター

## 2020年からの「大学入試改革」が、日本の教育・学校・学力・入試観を変える！

すでに5年後に迫った2020年から、昨今マスコミでも盛んに取り上げられるようになった「大学入試改革」が実施される。現行の「大学入試センター試験」を軸にした大学入試制度とは大きく変わるものになるということは、すでに多くの保護者をご存知のことだろう。

かつての「共通一次試験」が導入された1979（昭和54）年から30数年間、現在の「大学入試センター試験」まで受け継がれてきた、“1点刻みの”得点で合否が決まる入試のスタイルと、そこで測られる学力観そのものを変えてしまおうとする今回の「2020年大学入試改革」には、その実現の時期や形態、技術的な問題や高校教育現場の対応の可否などについて、現在の教育と受験の現場に関わる人々から賛否両論が寄せられている。

それでも、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催という国家的にも大きな節目を迎える年をターゲットイヤーにして、文部科学省が実

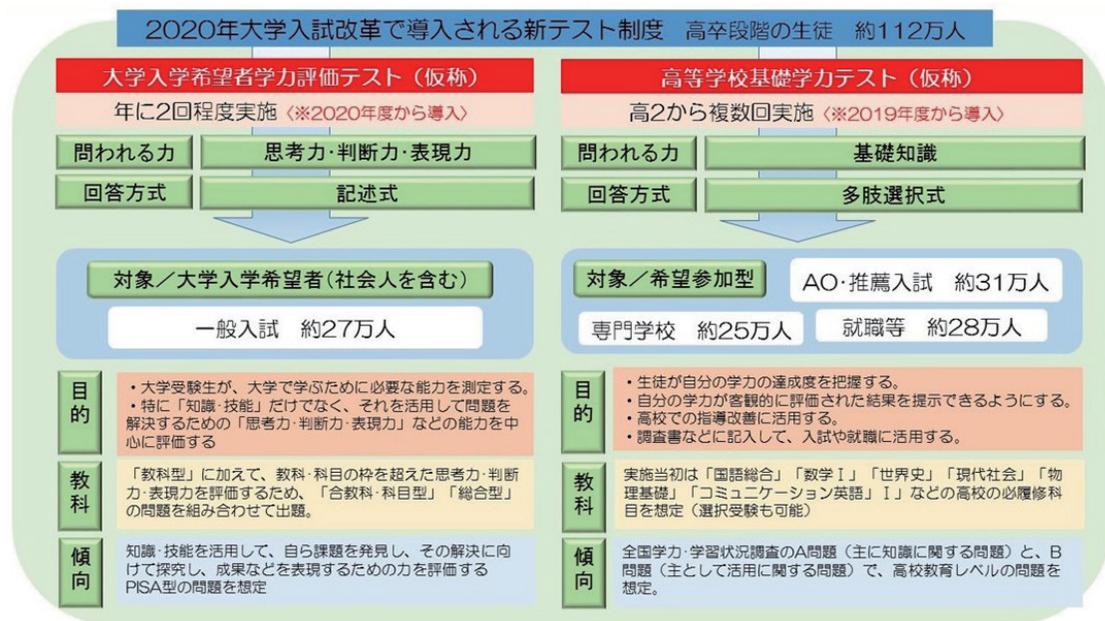
現しようとするこの大学入試改革（≒日本の教育改革）は、多少の時期の遅れがあったとしても、否応なく実現される運びとなることだろう。その最初の当事者が現在中学1年生となっている子どもたちであり、それに続く現在小学校6年生、5年生以下の子どもたちは、その先さらに本格的になる「新テスト」に直面する当事者に他ならない。

これまでの「大学入試センター試験」に代わって、新たに導入される「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」は、それぞれ、「高校段階で身に着けた基礎学力」と「大学に進学するために求められる学力」を測るための役割が課せられることになるが、そのうち後者では、「思考力・判断力・表現力」を問うために「記述式」の回答方式を中心とした、いわゆる“PISA型（＝OECD学力調査テストで出題されるような）”の問題が想定されているという。

そしてこれらのテストは、ともにPCやタブレット端末での入力（回答）による「CBT方式」を前提に開発され、AI（人工知能）による採点のシステムが導入されるといわれている。

さらに、いま日本の教育の最大の課題ともいわ

文部科学省ほかの公開資料から編集部が作成





れるグローバル化のために、新たな大学入試の制度では、英語の4技能（「読む」「聞く」「話す」「書く」）を総合的に評価するために、英検やGTEC-CBT、IELTS、TEAP、TOEFL-iBT、TOEICなど、民間の資格・検定試験の活用がすでに検討されている。

実際には、導入の初年度にあたる2020年には、まだ現行の『学習指導要領』のもとで学んできた高校生が受験する形になるため、本格的な「新テスト」制度（システム）の完成は、高校では2022年度以降（現在の小学校5年生の大学受験時）ともいわれている。その意味では、このレポートの読者のご家庭のお子さんたちが、まさに最初の当事者ということもできるだろう。

そして、小・中・高・大の各教育現場には「アクティブラーニング」の導入推進が新たに課され、いま教育の世界では、このアクティブラーニングの研修や、そのあり方についての議論が急速に盛んになっている。

いずれにしても、そうした日本の教育の大きな変化の節目（受け止め方によっては、明治の近代化以来の最大の教育改革とも…）の時期に中学～高校に進学し、やがて大学入試に挑んでいく現在の小学生と保護者にとっては、これから「中学～高校の6年間でどのような教育を受け、どのような力を身に着けるのか」が、わが子の将来にとって、かつてないほど重要な選択となってきた。

そして、そうした変化にいち早く柔軟に対応し、2020年からの大学入試改革で求められる「思考力・判断力・表現力」や、4技能のバランスのとれた高い英語力を育ててくれて、さらには大学を卒

業して社会に出たときに求められる総合的な学力と人間力（たとえば共生・協働・協調できる力とコミュニケーション力）、ICTスキルや課題解決力を育ててくれるのは、やはり私立中高一貫校だろうというのが私たちの解釈だ。そして、その意味では、現行の大学入試制度のもとでの大学合格・進学実績や、難関大学への合格者数・合格率のみを目安とした「学校選び」は、もはや時代にフィットしたものではないと考えるべきだろう。

この先、わが子が中高～大学を卒業して社会に出る10数年後を見据えて、その時代に「より良く生きる」力を育ててくれる私立中高一貫校を上手に探し出し、進学させてあげることが、親（保護者）にできる最大のサポートであると考えていただきたいと思う。

### 日本の教育が変わろうとする転換期に、私学の教育の何に価値を求めるか？

私立中高一貫校や中学受験の話題がマスコミで取り上げられるときには、これまでどうしても「私立中高一貫校の大学合格（進学）実績の良さ」に焦点をあてたものが多かった。

確かにそれは多くの小学生の保護者や、世間の多くの人々に広く知られている事実で、公立学校と比べたときに、そのことが私学にとってのアドバンテージのひとつになっていることは事実だろう。それゆえ、そうした切り口で私学が評価されることが多いのも当然といえば当然のことだった。

しかし、中学受験に長く関わり、多くの私学を取材してきた私たちが実感しているのは、私立中高一貫校の6年間一貫教育の成果は決してそれだけではないということだ。

私立中高一貫校の大学進学実績が良いのは、私学の中高一貫教育の特質を、①それぞれ独自の理念と教育方針を持つ私学の中高6年間の一貫した教育環境で、②中学入学から大学への進学までの生徒の成長を見通すことのできる教員が、③有機



この夏で進優勝した富士見丘（東）の団体少林寺拳法部。



この夏のインターハイに出場して善戦した八雲学園（東京・目黒区・女子校）のバスケットボール部。

的に再編された独自のカリキュラム等を柔軟に工夫し、④6年間の継続性・連続性や時間的なゆとりを活かす学習指導を、⑤入学してきた生徒と保護者の理解と賛同を得て、⑥生徒と教員、保護者の一体感と協力体制のもとで実現することのできる、⑦大学への受験・進学と学問のための基礎作りを両立させた、⑧バランスのとれた人間教育（全人教育）である、……と私たちが理解してきたことからすると当然の成果ともいえるだろう。

いずれにしても、私立中高一貫校の大学進学実績が、全国のほとんどの公立高校と比べて格段に優れていることは、すでに広く知られている（そうした成果につながる中高6年間一貫教育のノウハウを私学に学び、公立学校を選ぶ生徒にも提供するために生まれたのが、現在まで全国各地に設置されてきた公立中高一貫校に他ならない）。

しかし、そうした私立中高一貫校の大学進学実績の良さは、あくまで各私学がめざしてきた「人間教育（＝全人教育）」の副産物としての成果であり、決してそれを第一の目的とした教育が行われてきたわけではない。これから先、わが子の進路を考えていく保護者の皆さんには、まずその点を意識して、私立中高一貫校の教育の内容と、その成果を注視していただきたいと思う。

もちろん大学への進学状況（実績や進路指導スタイル）や6年間の学習指導が、保護者にとって大きな関心事であることは承知のうえで、それ以外の「幅広い私学の成果」に目を向けていただきたいのである。

そうすることによって、「進学実績や学習指導だけじゃない」私立中高一貫校の（生徒たちの）多様な活躍や成果が、大学進学実績以上の魅力をもって感じられるはずだ。

### 継続した中高6年間の時間的余裕が、 私立中高一貫校の大きな魅力

もともと私立中高一貫校は、「高校受験がない」ことによる時間的余裕と中高の継続性を生かして、教科の学習だけではなく、「行事や課外活動、好きなことや部活動、課外活動に思い切り打ち込める」ことが、大きな魅力のひとつであるといわれてきた。

人生のうち最も多感で成長著しい、12歳から18歳の6年間。人間性の基礎は、この6年間でつくられる部分がとても大きい。この大切な時期に、高校受験で分断されることなく、一貫した考えのもとで個々の生徒を見守り育ててくれる私立中高一貫校では、生徒自身がじっくりと自分と向き合い、将来の進路を含めた自分自身の生き方を考えるための気持ちの余裕も生まれる。

そうした時期に、自らの意思で好きなことに打ち込めることで、生徒は自尊感情や目的意識、学校生活へのモチベーションを高めることができるし、同時にそうした活動を通して、他者への理解や協調・協働する力を身につけていくことができる。

一方、教科学習にあっても、大学受験に必要な教科（英・数・国・社・理）だけではなく、美術、音楽、技術、体育などの教科を通じて、豊かな情操や感性を育てることができる。

私学のなかでも昔から人気の高い伝統校が、むしろ先の5教科の学習以上に、こうした側面（美術、音楽、技術、体育、家庭科など）で、充実した授業や課外活動、発表の場をもっていることにも目を向けていただくとよいだろう。

とくに教科学習の枠組みにとどまらず、平和教育、環境教育、異文化理解教育など、今後の社



会でますます必要になってくる知識や理解を深める機会も、私立中高一貫校の多くが積極的に設けていることにも注目したい。

こうした様々な側面における幅広い教育や活動を総合的、有機的に結びつけることで、初めて私学の中高6年間一貫教育が形成されていると考えてよい。そして、すでに多くの私立中高一貫校で実践・実現されてきた、これらの「総合的、有機的な」学習や活動、体験の機会を通して育むことのできるものこそが、冒頭でお伝えした「2020年大学入試改革」に十分に対応できる力であり、なおかつ中高～大学を卒業して社会に出たときに必要とされる、総合的な学力と人間力（共生・協働・協調できる力とコミュニケーション力）だと私たちは解釈している。

そして、中高の6年間の継続性と時間的なゆとりを生かして、身の回りのもの（自然や社会の出来事）を観察し、先生や仲間とさまざまなテーマで話し合い、学び合う授業や体験を通して、自ら

の頭でじっくりと考え、それを人に伝える力を育むことができる。それこそが「中高6年間一貫教育」の最大の利点だと考えてもよいはずだ。

そして、いま教育現場への課題とされる「アクティブラーニング」や「学び合い」の授業、オールイングリッシュによる英語以外の教科の授業なども、まだ頭と感性の柔軟な中学1年生から慣れ親しむことで、子どもたちにとっては、より吸収・消化しやすいものになることはいうまでもないだろう。

下に紹介したのは、工学院大学附属中学校が昨年、同校の学校案内に掲載した「21世紀に求められるスキル」と、それを育てるための具体的な教育展開のイメージ図である。

あくまで私立中高一貫校のひとつの（ただし最先端ともいえる）事例ではあるが、これから先にわが子の「学校選び」をする保護者の参考になるのではないだろうか。

工学院大学附属中学校が昨年、同校の学校案内で紹介した「21世紀に求められるスキル」と同校の教育展開のイメージ図。





## この夏に私立中高一貫校が見せてくれた、さまざまなスポーツの戦果

そしてこの夏にも、多くの私立中高一貫校が、さまざまな活動の成果を見せてくれた。

夏は全国の中高生にとってスポーツの季節。今年は和歌山県を中心とした近畿圏で8月に開催された「平成27年度全国高等学校総合体育大会(インターハイ)＝近畿総体2015」では、例年と同じかそれ以上に、私立中高一貫校の選手たちが、華々しい成果を見せてくれた。

ハンドボールで全国優勝の常連である佼成学園女子(東京・世田谷区)、テニスの強豪・富士見丘(東京・渋谷区)など、今年の「SGH(スーパーグローバルハイスクール)」指定校として選定された先進的な私立の女子進学校が、スポーツの場でもこうした全国トップレベルの活躍をしていることに注目していただきたい。この数年続けて女子バスケットボールで全国大会に進出してい



この夏のインターハイ関連のSNSサイト。私立中高一貫校のスポーツの活躍がつぶさにわかる!

る八雲学園の活躍なども特筆できる。

高校スポーツにおける私立中高一貫校の活躍は数多いので、関心のある方は、ぜひ写真の「平成27年度全国高等学校総合体育大会」のWebサイトを親子でご覧いただきたい。ざっと見ていただくだけでも「(進学校として知られる)こんな私学が、インターハイでも活躍しているのか!」と感じる方も多いのではないだろうか。

さらに高校スポーツの世界ではインターハイに限らず、各都道府県の予選大会で多くの私立中高一貫校は上位に食い込む奮戦を見せている。

また、惜しくも準決勝で負けてしまったが、全国高校野球選手権大会(夏の甲子園)でベスト4まで勝ち上がった早稲田実業高(西東京代表)と東海大学相模高(神奈川代表)などの私学の活躍は、この夏、多くの野球好きな小学生をも楽しませてくれたことだろう。

中学校のスポーツに目を移すと、先の「高校受験がない」利点を武器にして、高校スポーツ以



夏の甲子園大会を沸かせた早稲田実業(写真は東京都予選の準決勝)。野球の応援は、プラスバンドやチアリーディングの晴れ舞台でもあるという。



上に、各種の全国中学校選手権大会（略称＝全中）や、その都道府県予選大会で、私立中高一貫校が活躍を見せている。

もちろん公立中学校でもがんばっているチームは多いが、高校受験のための準備に時間を取られることなく、中学3年の夏の大会まで、好きなスポーツに打ち込めることの意義は、生徒にとっても保護者にとっても非常に大きいといえるだろう。

このほかにも、野球、サッカー、テニス、ソフトテニス、ラグビー、バスケットボール、バレーボール、卓球、バドミントン、ダンス、柔道、剣道、空手、少林寺拳法、水泳、水球、体操など、各種のスポーツで、この夏、私立中高一貫校が多様な活躍を見せている。関心のあるご家庭では、ぜひ各種目（競技）のWebサイトで調べてみるとよい。お子さんにとっても、受験準備の目標や励みになることだろう。

## 文化部も負けていない、私立中高一貫校の多様な成果

私立中高一貫校の部活動での活躍は、運動部だけではなく文化部も負けていない。むしろ体格や運動能力で差をつけられることなく、ほとんどの私学で中学生と高校生と一緒に活動することの多い文化部のほうが、私立中高一貫校の全国的な活躍が目立つという見方もできる。

象徴的なのが、暁星高校の競技かるた部。毎年、近江神宮を中心会場として行われる「全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会」では、この夏にも団体戦で全国優勝。8年連続10回目の全国制覇という偉業を達成している。漫画・TVアニメ「ちはやふる」人気の影響もあって競技人口が急増したという競技かるた。興味のある子どもたちもいるだろう。

同じくこの夏に行われた合唱の「第81回NHK全国学校音楽コンクール東京都コンクール本選」では、中学校の部で豊島岡女子学園と大妻



東京都中学校男子バレーボールの都大会で対戦した安田学園中とサレジオ中（小平市）。両校はともに関東大会でも3位に入賞し、全国大会に駒を進めた。

中野がともに金賞を受賞。頌栄女子学院が銅賞、桐朋女子、聖ドミニコ学園が優秀賞を受賞。高等学校の部では、豊島岡女子学園が金賞、大妻中野が銀賞、東洋英和女学院と頌栄女子学院が銅賞、桐朋女子、中央大学附属、早稲田実業が優秀賞を受賞している。

豊島岡女子学園はほかにも、この夏に行われた「第38回全国高等学校囲碁選手権大会」の女子団体戦で全国準優勝を果たしている。同じ囲碁の全国大会では、白百合学園が4位、渋谷教育学園幕張が6位に入賞した。

囲碁の男子では、開成、筑波大学附属駒場、桐蔭学園などの強豪が今年も全国高校大会に出場。渋谷教育学園幕張も2回目の出場を果たし、今年は開成が団体戦で優勝を果たした。

また、やはりこの7月に行われた「第19回全国中学・高校ディベート選手権（ディベート甲子園）」の中学の部では、開成が優勝、女子聖学院が準優勝を果たしている。

このほかにも、吹奏楽、管弦楽、マーチングバンド、美術、書道、漫画、生物、化学、物理、放送、ラジオ、鉄道研究、コンピュータなど、様々な文化部で、私立中高一貫校が全国レベルのハイレベルな活躍を見せている。

つまり、運動部・文化部に関わらず誰もが自分の好きな部活や種目に打ち込むことができ、しかも高いレベルでの活躍や成果を出すことができるのも私立中高一貫校の大きな特色ということなのだ。

そうした継続的な6年間の部活動を行うことのできる環境があり、しかも熱心な顧問の先生（専任教員なら転勤することはない）や指導者（OBのつながりや支援力も強い）が面倒を見てくれる。それが、長くても10年毎に転勤を余儀なくされる公立中学・公立高校と私立中高一貫校の大きな違いでもあるのだ。

## 学校の枠や国境を超えた大会や催しでも、 私立中高一貫校の生徒が大活躍

ほかにも、スポーツの中体連、高体連、文化部における各種団体が主催する中高の大会や発表会だけではなく、学校の枠や国境を超えた大会や発表会、コンクールなどで、私立中高一貫校の生徒が多彩な活躍を見せている。

やはりこの夏（7月）に行われた「第56回国際数学オリンピック(IMO)タイ大会」には、日本代表として、開成高（3名）、筑波大学附属駒場高（2名）、灘高（1名）から6名の選手が出場。このうち4名が金メダルを獲得し、総合順位では日本が1位という快挙を成し遂げている。

また、世界の高校生が国連会議を模して国際問題を討議する「模擬国連」をめざして、積極的な取り組みをしている私立中高一貫校が多いが、昨年の夏もニューヨークで開かれた「グローバル・クラスルーム国際模擬国連大会」では、渋谷教育学園幕張高の女子ペアが「国連人権理事会」部門でみごと最優秀賞を受賞した。日本の最優



全国145校が参加した「鉄道模型コンテスト2015」モジュール部門で最優秀賞を獲得した共立女子の作品

秀賞受賞は初めてだったという。

小学生にも身近なものでいえば、この8月8日（土）～9日（日）の2日間、東京ビッグサイトで開催された「鉄道模型コンテスト2015」には、全国145校（昨年は119校）が鉄道模型、鉄道レイアウトを出展し、「モジュール部門」、「一畳レイアウト部門」「HOゲージ部門」の部門ごとに来場者や審査員による投票が行われ、2日目に各賞が発表された。例年、全国から集まる参加者のなかには、女子高や鉄道研究部以外の地理歴史部や物理部の姿もあり、地域性だけでなく、表現方法までバラエティに富んでいるという。

最も参加者が多い「モジュール部門」で、今年の文部科学大臣賞（最優秀賞）に輝いたのは、共立女子高等学校の作品。そのほか私立中高一貫校では、優秀賞に灘高等学校、加藤祐治賞にラ・サール高等学校、学生が選ぶベストワン賞に獨協中学・高等学校がそれぞれ選ばれた。

こうした活動は、このほかにも多岐にわたるが、私立中高一貫校の生徒は、中高生がチャレンジできるこうした機会を生かして、自分たちの活動や作品のレベルを高めようと努力を重ね、その過程で、さまざまな力を育てていくことができる。そして学校の枠を超え、さらには日本の枠も超えて、世界の舞台上で活躍を見せてくれる生徒も育ってくる。

そうした課外・学校外での活動が、「グローバル人材の育成」にもつながってくることが、私立中高一貫校の「プラスアルファ」の成果ということができるはずだ。

8年連続で、絶対王者といわれている！  
競技かるたの全国大会では、暁星高が10回目の全国優勝という偉業